

自分のことは自分で調べて初めて分かりました クマ被害の実態と転倒事故のこと

OWCC 中川和道 20260716

山の教室 2026 年 6 月 30 日でクマ被害の講演を行った。超力作「登山者のクマによる人身被害に関する調査」¹⁾を何日もかけて読み込み、ずいぶん教えていただいた。¹⁾は、よく言われている「出会い頭が多い」や「クマ鈴は有効」などは登山者には当てはまらないとのデータだ。これまでの対策は登山者には見直されるべきであることを示唆するショッキングな内容だった。よく似た傾向を、労山大阪の事故事例集²⁾で私たちは見いだしてきた。「最多は道迷い」ではなく「最多は転倒滑落」だったのだ。対策を見直す必要が生じ、同じくショッキングだった。共通する教訓は、「自分たちの事故統計は自分たちで調べる。警察など他人の調べを引用し鵜呑みにしているだけでは自分たちの実態がわからない。対策を誤る。」ことであった。今回は、それを書いてみよう。

¹⁾は、まことに超大作だ。1949 年から 2025 年までの登山者のクマ人身被害は 179 人(含 死亡 11 人)。それらをとことんデータ分析し、もとのデータ文献もすべて書いてある。よくやって下さった。著者 fifty-nine さんに大いなるお礼を申しあげたい。分析から得られたグラフが 43 点もある。それらをもとに、中川独自の視点から掘り下げた諸点も加えて、以下、箇条書きに列挙する。著者の見解とは異なる点もあって申し訳ないが、中川個人の分析意見として受け取っていただき、読者の方々のお考えも表明しあい、互いに深めていきたい。

1. 図 10 と図 11 : 被害発生時刻別の分析 : 著者が言うとおりだ。登山者の「事故が最も多いのは 13 時台であり、15 時以降は減少する。一般に「早朝と夕方にクマの活動度が高まるので要注意」と言われているが、その時間帯の被害が特に多いわけではない。登山者の活動度の方が、被害発生頻度を決める上で影響が大きいということかもしれない。とは言っても、早朝と夕方に気をつけなくて良いという訳ではない。」
2. パーティー人数の分析 : 被害 179 人のうち、1 人パーティー(つまり単独行)が 72 件 44%と最多。2 人パーティーは 38 件 24%で 2 位。3 人 4 人 5 人の合計は 24 件 15%。「複数人パーティーであっても、話ができる位近くで行動しないと、クマとの遭遇抑止という意味では単独と変わらないだろう。」という著者の考察に中川も同意。
3. 図 30 : 被害発生環境の分析 : どこでやられたかという場所の分析だ。登山道が 98 件 61%でダントツに多く、林道 10 件遊歩道 4 件登山口付近 9 件と合わせると 121 件 75%で、普通に登山道を歩いていて被害にあっていることが分かる。著者は「山小屋付近、テント、登山口付近(計 18 件)」というのは、人間の食べ物に依存したクマによるものかもしれない。これは人身被害に至る古典的なパターンであり、近年も北アルプスでテント場に出没するケースが多発している。」とする。涸沢でやられた中川も、これに賛成である。
4. 図 31 : クマの出現状況の分析 : 73 件中、出会い頭 3 件、突然・いきなり・茂み・やぶから・飛び出してきた合計 30 件(中川が合計)、ほか 28 件。著者は「クマと人の双方が予期せず近距離で遭遇する「出会い頭」が危険とよく言われるが、今回の調査でこの表現が使われているのは 3 件のみ。一方、全体の約 4 分の 1 で、クマが「突然」あるいは「いきなり」現れたと言っている。この中には、出会い頭に類するものもあるかもしれない。しかし、それとは別に、クマが先に登山者に気づいて警戒していて、登山者が気づかずに

接近して来るので仕方なく防御的攻撃を行う、という場合がかなり含まれているのではないだろうか。通常クマは登山者に気付けば黙って距離を取るはずだが、子グマ連れ等の理由ですぐに移動できない場合に、このようなことになるのかもしれない。」とする。

中川の追加意見は、登山者が気づかず接近していくのではと気になる。クマは争いをさけようと唸り声や地面をたたくなどで登山者に知らせようとするから、登山者がそれに気づく必要があると思う。クマが立ち去らず隠れるには理由がある。(1) 子グマ連れ、(2) 鹿の死骸などを備蓄した場所は守りたい、(3) けがをしている、などクマにも理由があるはずである。被害を及ぼした後に登山者をエサとして食べずに一目散に逃がっている点からも、登山者とクマ双方が互いの存在や威嚇に気づきあえば、被害は避けられると考えられる。これがないと、**登山者は、クマに「襲撃させてしまう」行動をとっていることになる。**「登山者とクマ双方が互いの存在表明や威嚇に気づきあう」技術の開発向上、これこそが今後必要な対策だと中川は強く思う。

5. 第 20 項目) 予防対策の有無の分析：やられた登山者の回答 28 件のうち、クマ鈴装着あり 13 件、クマ鈴装着なし 12 件、ヘルメット装着あり 2 件、クマスプレー装着あり 1 件。著者の見解は「予防対策の有効性を統計的に検証するには、効果があった場合となかった場合の両方のデータが必要。この調査で得られるのは効果がなかった場合のデータだけであり、それも件数が少ないので、あまり参考にならない。とはいえ、「クマ鈴を装着していた」の方が「装着していなかった」よりわずかだが多いのは、ちょっとショックではある。なお、クマ鈴についての言及が現れるのは 2005 年の記録から。」中川も同意。

中川がクマ鈴の試験をした結果と合わせてさらに考察。(1)クマ鈴を装着していたかいなかったかという問いは、実態をうまくつかめないのではないかと理由は、装着していてもなかなか鳴らないからだ。まず、(1a)装着位置が腰だと、鳴りにくかった。忍者の訓練で腰につけた鈴を鳴らさず駆け抜けるというのがあると聞いたことがある。膝がやわらかく、体がぶれない若者登山者だと、鈴は鳴らないのではないかと？中川と同僚は「私は老人でふらつきながら歩くから、ある程度は鳴りますよ」と自虐的発言をする。(1b)ストックの手の位置に鈴をつけると、鳴った。クマ鈴を装着していたのかという問いは、「**クマ鈴はちゃんと鳴っていたのにやられたのか？**」という問いに替えた方がよい。(2)クマ鈴がちゃんと鳴っていても、水音が大きい沢のそばや大風の時などは、クマに聞いてもらえない可能性があることは、しばしば指摘される。こんな場合は大音響ホイッスルで対応しようと中川は考えている。

紙面が尽きたので、これ以上の展開を今回は省略する。神戸市や兵庫県は、日本の中でもクマ対策がよく進んだ地域で、20 年にわたる取り組みが成果を上げており、人間を襲ってくるクマは、ほぼ捕獲済み教育済みであるらしい^{3,4)}。山の教室 6 月 30 日では、約 60 分を費やしての講演となった。機会があれば、ご紹介したい。

文献

¹⁾20260615 登山者のクマによる人身被害に関する調査-ヤマレコ

<https://www.yamareco.com/modules/yamanote/detail.php?nid=3986>

²⁾大阪労山「事故防止は仲間の知恵で」2021 年。

³⁾20260615 兵庫県ツキノワグマ対策連絡会議 資料 「ユニバーサルなスポーツ施設調査・検討事業」

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk20/documents/dai1kaihyogokentukinowagumataisakurenrakukaigi.pdf>

⁴⁾20251115「兵庫県が衝撃のクマ狩猟禁止 数の管理 800 頭政策の裏にある現実と課題」

<https://www.tanikawa-clinic.jp/kuma-hyogo-kanri-2025/>